

ポラリスを仰ぐ北の大地から

凹んだダルマ

岩見沢市医師会 会長 とくち ふみ お 得地 史郎

昨年観測史上最も暑かった夏の8月、長男夫婦の住む函館に5日間滞在した。当初旅の目的地としていた東海地方へ台風が接近したことによる、急な予定変更であった。思いがけない訪問に息子夫婦には飽きられたが、久しぶりに孫と過ごせて楽しかった。

8月8日マウイ島で大規模な山火事が発生し、函館滞在中、連日その続報を目にすることとなった。ハリケーンの強風と「フラッシュ早魃」のため火が一気に燃え広がり、115名が死亡し、今なお60名以上の住民が行方不明となっている。

この報道を観て、亡き父から繰り返し聞かされていた「函館大火」を思い出した。

函館は歴史上何度も大火に見舞われているが、昭和9年3月31日のそれは史上最悪の被害をもたらした。発達した低気圧による最大瞬間風速40mもの強風が、函館山の麓の住吉町の民家を倒壊させ、その囲炉裏の火が燃え広がって、市街地面積の1/3、家屋1万棟以上が焼失、溺死や凍死者を含む死者2,166名という大災害となった。これにより市民の半分に当たる約10万人が被災した結果、多くの住民が札幌市に移り住むこととなり、函館市は道内最大都市の座を札幌市に譲り渡してしまう。

当時、2歳の父を抱える祖父一家は火元近くに住んでいて、降雪の中住民の多くが高波が押し寄せた海岸を目指して避難する中、反対方向の函館山方面に逃れて九死に一生を得たそうである。避難する際、祖母は父を胸に抱き、祖父は何を思ったか、張りぼての大きなダルマを背負って逃げたそう。

今も母が暮らす岩見沢市の実家には、祖父の背中に強く括り付けられ、背面が凹んだままの高さ1m程のダルマが、守護神として神棚の下に祀られている。

正月には各地から家族全員が実家に集まり、神棚とともに祀られたダルマに心静かに手を合わせ、1年間の無病息災を祈っている。



昭和最後の医師世代

空知南部医師会 会長 まきの ひろ き 牧野 裕樹

私は昭和63年に医師国家試験に合格した昭和最後の医師世代です。

現在の若手医師の方々が読まれると驚かれることもあるかと思いますが、当時のことを少し思い出してみました。

なにせ約35年以上前のことなので、国家試験が2月だったか3月だったか記憶が定かではありません。当時の国家試験の合格発表は5月であり医師免許証の発行は6月でした。

私の医師免許証に記載されている大臣名は後に総理となる小泉純一郎大臣です。当時はもちろん厚生労働省ではなく厚生省でした。

昭和63年は東京ドームや青函トンネルが完成、流行した曲は光GENJIの「パラダイス銀河」や長渕剛の「乾杯」でした。世はバブル期であり、ワンレン・ボディコンの女性が街にあふれ、「24時間戦えますか」がキャッチコピーであったリゲインが流行した年でもあります。

現在の研修医制度となる前の時代であり、大学医局はたくさんの医局員がおり、教授回診はテレビドラマの再現のようになっていても過言ではありませんでした。

若手医師の部屋では喫煙者も多く、灰皿が当たり前のように置かれていたのも、今の時代とは大きな違いです。

北大病院は当時6階建ての病院でしたが、若手医師は通称7階と呼ばれていたエレベーターもない屋上に通じるボロ部屋で生活。真面目に勉強・研究をしていましたが、時にはテレビゲームや屋上でキャッチボールをすることもできるなど、厳しいながらも少し緩いことも許される良い時代でもありました。

研修医1年目の1月に昭和天皇崩御のニュースを研修先の病院内で知り、コンビニやスキノのネオンが消え街の中が暗くなったのを思い出されます。

そして時代は平成、令和へと変わりました。

昔話をするとお爺さん医師のように思われるかもしれませんが、現在62歳、医師としてまだまだ勉強し、頑張る所存でありますので、皆様どうぞよろしくお願い申し上げます。